二十九話

昔、むがし、お堂の下さ、正直だ爺さま住んでえだけど。だんだん寒ぐなってきた秋の昼過ぎのごったけど。爺さま、雪ア降れば杉葉も拾るえなぐなるし、今日ア天気もええし、お堂の林さ行って、杉葉コでも拾るてくるがな、と思ってでがげだど。春まで炊ぐの、いっぺふるわねばなねど思って、しっちかげで拾るてえるうぢに、西の空さ日ア落ぢで、あだりアうす暗ぐなってきたけど、爺さま、「ああ、日ア暮れだな。どれ、神様でも拝んで、家さ行ごがな」て一人ごとさべりながら、お堂の中さ入って、神様拝んでえだば、だれが、ががやど話しながら、石段上ってきた者アあるけど。

誰だべ、今頃暗ぐなる時、と思って戸の陰コから外見だば、鬼アど二匹きたおだけど。爺さま、びっくらこえで、逃げるにも逃げらえねし、しかだなぐお堂の天井さ上って、かぐれでえだど。そしたば、五の宮の鬼だの、八森の鬼だの、三の台の鬼だの次々とあづばてきて、ばくぢうぢはじめだど。爺さま、天井のしまコさ隠れで、せっこらせっこらて、えだじども、腹もへてきたし、早ぐ止めで行てければえやど思ってらたて、ながなが止めるふうもながけど。ちょうど夜中頃、八森の鬼ア、「一番鶏コア鳴げば村の人どア起ぎだしてくるし、見らえるどてえへんだしな。」て、へてら声ア、爺さまさ聞けだけど。よえ、よえ、えごど聞だ。鬼アどに朝ままでえらえるごたば、てえへんだ。と思って着物の袖コ、ばたばたとはだえで、「コケコッコーッ」て、鶏の鳴ぎまねしたど。そしたば、今までむじゅうになて、博打やてだ鬼アどア、「そうら、一番鶏ア鳴でら、早ぐ逃げねば、夜ア明げでしまらア。」てへて、ぜにもなにもあちこちに、われ勝ちに戸口がら、逃げて行てしまたど。爺さま、天井がら降りできて、鬼アどアちらがして行たぜにコだの宝だの、あづべて家さ戻ってきたけど。

それ聞いだ隣の、欲ばり爺さま、おれも行って金もうげしてけら、ど思って次のばんかだ、お堂の天井さ上って、待ちでえだど。そしたば、その晩げも暗ぐなるど、あっちこっちの鬼アどア、あづばってきて博打はじめだど。欲ばり爺さま、待ちきれなふて、夜中さばまだ間あたども、袖コばたばたとやって、「コケコッコーッ」て鶏の鳴きまねしたど。鬼アどア、「そうら一番鶏アなえだ。」て、又われ先にど逃げだども、一匹の鬼ア余りせいで、戸口の鍵さ耳ふかげでしまて、逃えなぐなたけど。そして、「鍵さ耳ふかげだでア、ヤーンバセ。鍵さ耳ふかげだでア、ヤーンバセ。」てへながら、ふぱてえだけど。その姿あんべえ、余りおがしふて、がまんさえなぐなって、爺さま、「ぐふ、ぐふぐふッ。」て笑ってしまたど。その声聞いだ鬼アどア、どやどやど戻てきて「このやろうア、さぎの晩げも鶏のまねして、銭とてえたのあ、このぢぢだべ。ふぐじりおろして、性つけでやれ。」てへて、がりもりどまぎがらおろされ、ただがれるやら、かちゃがれるやら血みどろけにさえで、命からがら逃げできたけど。

余り欲ばりしたり、人まねすると、ろくたごどアねもんだど。

ドットハラエ

今でも、何がのあづまりの後、後始末もしねで、どっと帰えってしまるごど、この辺では、「鬼の博打アぶかれだえた。」てへるおな。